

國史肇要

靈元至孝格

卷十三

甲
第
十三
卷

U 5
16
13



甲
卯十三年

伊予門
16
13

國史攬要卷之十三

○靈元天皇

諱

ハ識仁

後西^ゴ天^{サイ}皇ノ皇弟ナリ、母^ハ新廣義門院藤原氏、○寛文三

年、正月天皇即位、年甫テ十歳、關白光平攝政タリ、幕府出

羽守松平直政、兵部大輔大澤基時ヲ遣テ即位ヲ賀ス、○

五月幕府諸侯ニ令メ、殉死ヲ禁ス、○四年十月、林春齋幕

命ヲ奉メ、本朝通鑑ヲ撰シ、是ニ至テ成ル、凡三百卷、○五

年七月、幕府天下ニ令シ、布帛ノ長サ二丈六尺ヲ一端ト

東方書院
棚谷元善

編輯
南器

○靈元

為ス、○九年七月、先是蝦夷^シ玳^リ利ノ首、勺^シ楮^リ印^リ其部衆ヲ
率テ我カ商舶二百餘人ヲ掩殺ス、此月廿日幕府松前恭
廣ニ命メ往テ之ヲ討シム、十月恭廣^シ玳^リ利ニ至リ、其首
以下五十餘人ヲ捕ヘテ之ヲ誅シ、巢穴ヲ焚テ還ル、○十
一年正月、紀伊大納言源頼宣薨ス、頼宣雄豪ニメ學ヲ好
ミ士ヲ愛シ諫ヲ納ル、善行甚多シ、○四月、伊達宗勝罪ア
リ、其邑一関ヲ奪テ土佐ニ流ス、宗勝ハ政宗ノ季子ナリ、
一関ニ封セラレ、兵部少輔ニ任ス、驕縱多慾、其宗藩仙臺
ヲ奪ニテ謀ル、兄忠宗卒シ、其子綱宗封ヲ襲ニ及テ、仙
臺ノ老原田直則等ト陰カニ計リ、綱宗ヲ誘テ巷街ニ游

ヒ名妓ニ溺リ、酒色ニ沉湎セシメ、其過失ヲ聲メ之ヲ幽
シ、其幼子竹千代ヲ立テ、其輔佐トナリ、間ヲ伺テ之ヲ除
キ、已レ代ツテ立ント欲ス、仙臺ノ老伊達宗雪^{ハネキ}、稍々其謀
ヲ悟リ、其妹淺岡ヲ以テ竹千代ノ乳母ト為シ、松前重光
ヲ以テ其近侍ト為シ、以テ不虞ニ備フ、一日淺岡竹千代
カ膳ニ就クヲ見テ心動キ、膳夫塩沢丹三郎ヲ召テ其食
ヲ嘗シム、忽チ死ス、淺岡松前大ニ驚キ、之ヲ宗勝ニ告ク、
宗勝馳ヒ至リ、庖人園田善兵衛、醫師大場道益ヲ捕ヘ、直
チニ之ヲ斬ル、於是淺岡松前益々宗勝ノ輔佐ヲ疑フ、宗
勝モ亦自ラ安ンセス、夜ル潜カニ其腹心ノ士ヲ遣テ、竹

千代ヲ刺シトス、重光捕ヘテ之ヲ縛ス、邸内洵々タリ、已ニノ其黨神並某、逆ニ與スルヲ悔ヒ、陰カニ盟昏ヲ竊ミ、走テ仙臺ニ往テ自首ス、宗雪驚キ、馳テ江戸ノ邸ニ至リ、書ヲ以テ之ヲ幕府ニ訴ス、老中板倉重矩等、其訟ヲ聴キ、獄決シ、直則等死ニ抵ル、已ニノ直則、大老酒井忠清ニ因テ懇ヘテ曰、臣猶一寃罪アリ、願クハ之ヲ白ニスルヲ得シ、諸老乃チ忠清カ邸ニ莅ミ、復タ宗雪直則ヲ召テ之ヲ聽断ス、直則辞屈メ欺クヲ得ス、宗雪直則退正廳休ス、直則一紙ヲ懷ニ執リ、進テ宗清ニ謂テ曰、吾カ所謂寃罪ハ是ナリト言未タ畢ラス、カヲ拔テ宗雪ヲ斬ル、柴

田外記、蜂屋六左衛門驚キ起テ直則ト戦フ、柴田死シ、蜂屋重劍ヲ蒙ル、忠清ノ臣、石田彌右衛門、太田伊兵衛、町奉行島田出雲守等馳セ至リ、遂ニ直則ヲ殺ス、宗勝カ罪斬ニ當ル、特ニ死ヲ減メ土佐ニ拘シ、其他ノ逆黨數十人、皆之ヲ仙臺ニ戮ス、竹千代後ニ綱村ト稱ス、○十二年、石川犬山没ス、犬山三河人名ハ重之、大坂ノ役ニ戦功アリ、後東山ニ栖隱シ、詩仙堂ヲ築ク、學ヲ好ミ、詩及ヒ谷ヲ善クシ、林道春、那波道圓、松永昌三ト名ヲ齊クス、其高風盛韻世ノ知ル所ナリ、○十二月、會津ノ藩主保科正之卒ス、正之賢明ニノ學ヲ好ミ、兼テ神道ニ通ス、將軍家綱ヲ輔佐

政績アリ文武ヲ以テ一藩ヲ勵マシ、徳教大ニ行ハル、
板倉重宗、寧正之ニ問テ曰、余京ニ在テ、湯武放伐ノ吏ヲ
諸儒ニ問フ、皆明晰ナラス、足下以テ如何ト為ス、正之曰
傑紂誠ニ暴主ナリ、然レ放伐之ヲ我國ニ行フ可ラス、今
日ニ在テ文王伯夷ハ師トス可シ、湯武ハ則ルニ足ラス、
重宗大ニ感ス、○延寶元年五月、禁中火アリ、五千餘戸延
焼ス、是月諳尼利亜ノ船、長崎ニ來テ互市ヲ復セントテ
請フ幕儀許リス、○三年幕府人ヲ遣テ無人島ヲ檢セシ
ム、異木珍禽ヲ以テ歸ル、島ハ丈島ヲ距ルル百里、○八年
五月、大將軍源家綱薨ス、年四十、嗣ナシ、其弟參議綱吉館

林ヨリ入テ繼ク、家綱贈官前代ノ如シ、嚴有ト謚ス、○七
月源綱吉ヲ以テ征夷大將軍ト為ス、○天和元年、六月、越後
侯源光長罪アリ、其封高田ヲ奪テ之ヲ伊豫ニ流ス、初メ
光長子無シ、其弟長良之ヲ繼ントテ希フ、衆モ亦望ヲ屬
ス、其老小栗美作、陽ハニ長良ヲ推奉ノ、陰カニ長良ノ後
子綱國ヲ立テ、嗣ト為ス、長良大ニ望ヲ失フ、於是老臣
萩田主馬長良ト同ク幕府ニ訴テ、小栗父子カ專權私曲
ノ状ヲ陳ス、獄決セサルト數年、是ニ至テ綱吉親ク之ヲ
聽斷シ、美作父子ニ死ヲ賜ヘ、光長ヲ伊豫ニ配シ、長良主
馬ヲ八丈島ニ流シ、大老酒井忠清、老中久世廣之カ職ヲ

免シ、酒井忠能カ封ヲ收メ、姫路ノ松平直矩、廣瀬ノ松平
 近榮連坐ノ封ヲ削ラル、於是諸侯皆將軍ノ威断ヲ畏ル、
 ○二年五月、備前少將池田光政卒ス、光政ハ侍從利隆ノ
 子、輝政ノ孫ナリ、英明ニメ學ヲ好ミ、韜畧ニ精シ、熊沢蕃
 山ヲ舉テ國政ヲ任シ、封内大ニ治ル、郷校ヲ設ケ異教ヲ
 排シ、良政甚多シ、卒ス年七十四、○將軍學ヲ好ミ、屢々林
 信篤ヲノ書ヲ講セシム、京師ノ儒木下貞幹ノ名ヲ聞テ
 之ヲ聘ス、貞幹字ハ直夫、順庵ト稱ス、學術淳正、初メ後光
 明帝辟ノ直講ト為ント欲ス、崩スルニ遇フ、是ニ至テ幕
 府ノ儒員ト為ル、門下名士多シ、新井瑛室直清、雨森東松

浦儀、祇園瑜、西山類、泰南部景衡、柳原玄輔等其撰ナリ、○
 山崎嘉汝、字ハ故義、闇齋ト號ス、程朱ノ學ニ精シ、門下
 六千人ニ至ル、晚ニ神道ヲ好ミ、遂ニ神學ノ中祖ト為ル、
 其豪才卓識世ノ知ル所ナリ、○貞享元年八月、參政稻葉
 正休、大老堀田正俊ヲ管中ニ殺ス、初メ將軍家經ノ薨ス
 ルヤ、諸老其嗣ヲ議ス、酒井忠清、鎌倉ノ故事ニ徇テ、親王
 ヲ迎テ、關東ノ主ト為ント欲ス、衆可否スル者無シ、獨リ
 正俊執テ不可ト為シ、忠清ト争フ、衆遂ニ正俊ノ議ヲ贊
 ケ、綱吉ヲ館林ニ迎テ之ヲ立ツ、正俊乃チ忠清ニ代テ大
 老ト為リ、功ヲ以テ祿ヲ増シ十三萬石ニ至ル、稍ク驕恣

ニメ私曲多シ、正休其專横ヲ憤リ、是ニ至テ遂ニ刺メ之
ヲ殺ス、老中大久保忠朝、戸田忠昌、阿部正武大ニ驚キ、偕
ニ擊テ正休ヲ殺ス、正俊第二歸テ死ス、時ニ列族争テ堀
田ノ第二至ル、獨リ水戸中納言光國其世子ト稻葉ノ邸
ニ至リ、之ヲ弔慰ス、○二年正月、將軍敕ヲ奉メ、日次記ニ
百三十五卷ヲ獻ス、○三年四月、紀州ノ臣和佐ワサ臺八郎、射
ヲ蓮華王院ノ堂ニ試ム、所謂三十三間堂ナリ、一昼夜ニ
一萬三千五十餘箭ヲ放ツ、鵠ニ中ル者八百三十三矢、
時人稱ノ海内無雙ト為ス、慶長以來射ヲ善スル者皆技
ヲ此堂ニ試ム、和佐カ如キハ前後比無シ、○九月、先是、林

信篤、木下貞幹、人見友元、幕命ヲ奉メ、武徳大成記ヲ撰ム、
是ニ至テ成ル、○四年三月、天皇位ヲ皇太子ニ禪ル、帝聰
敏ニ、最モ和歌ヲ善ス、帝嘗テ數百金ヲ以テ、舶來ノ磁
器トク登々谷トクト稱スル者ヲ獲テ、群臣ニ示ス、皆珍器ト稱ス、
勸修寺經敬ツネトシ之ヲ手ニ承ケ、佯テ墜メ、其器ヲ碎ク、滿坐色
ヲ失フ、經敬伏テ罪ヲ謝シ、因テ奏メ曰、古ヨリ御器ハ皆
本朝ノ産ヲ用フ、未ク外國ノ舊器ヲ以テ供御ニ充ルヲ
聞カス、願クハ陛下異物ヲ貴フテ勿レ、帝之ヲ嘉納ス、享
保七年、八月六日崩ス、壽七十九、
○東山天皇 諱ハ朝仁

東山天皇 諱ハ朝仁 靈元東山 六

靈元天皇第四皇子ナリ、母ハ敬法門院藤原氏。○四月
 天皇即位年甫十三、関白兼輝攝政タリ、將軍肥後守保
 科正容等ヲ遣テ、即位ヲ賀シ、名刀及ヒ金三百枚ヲ献ス、
 又上皇ニ金ヲ献ス、○元祿元年、幕府僧隆光カ為ニ、一寺
 ヲ神田ニ建テ、護持院ト稱ス、又奏請ノ隆光ニ大僧正ヲ
 授ク、將軍之ヲ尊信シ、且ツ其祈禳ノ功ヲ賞スル也、尋テ
 又其所生本莊氏ノ請ニ從テ一寺ヲ牛込ニ建テ護國寺
 ト名ツク、僧尊融ヲ以テ之カ主ト為ス、初メ本莊氏春日
 局ノ婢ト為リ、大猷公ニ近テ身ムコ有リ竊カニ尊融ヲ
 ノ之ヲトロシム、尊融曰、生ム所男ニシテ且大猷ヲ承ン、果

其言ノ如シ、本莊氏尊融ヲ以テ神僧ト為シ、寺ヲ創セ
 シト請フ、將軍亦之ヲ異トシ、其請ニ從フ、是ヨリ屢々二
 寺ニ臨ム、○四年正月、先是幕府命メ學校ヲ神田ニ建テ
 至是成ル聖堂ト稱ス、綱吉自ラ孔廟ノ扁額ヲ各メ大成殿
 ト曰フ、忍岡ノ孔子ノ像ヲ此ニ遷シ、又十哲ノ像ヲ造リ、
 林信篤ニ疑ヲ蓄ヘシメ、奏メ大學頭ニ任ス、室町氏ノ時、
 五山ノ僧徒專ラ文學ヲ掌ル、是ヨリ以來儒ヲ業トスル
 者皆祝髮衲衣、其風ニ徇フ、綱吉之ヲ歎シ、是ニ至テ其幣
 ヲ改ム、於是人見友元、又兵衛ト稱シ、木下順庵、平之丞ト
 稱シ、和田春堅、傳藏ト稱シ、大河内春龍、新助ト稱シ、林春

國史學要

卷十三

○東山

七

益、又右衛門ト稱シ、深尾春庵、權右衛門ト稱ス、其他諸藩
 及ヒ市井ノ儒士、皆之ニ例ヒ、濟々風ヲ成ス、二月釋典ヲ
 聖堂ニ行フ、將軍亦タ之ニ莅ム、○二月綱吉自ラ論語ヲ
 營中ニ講シ、侯伯及ヒ醫官僧侶ヲノ之ヲ聴シム、是ヨリ
 後大學中庸周易等ヲ講シ、諸臣皆之ヲ聴ク、フ許ス、又
 數ノ諸侯ノ邸ニ臨ミ、必ス自ラ經ヲ講ノ之ヲ聴カシム、
 尋テ其臣僚ニ命ノ講セシム、講畢レハ必ス散樂ヲ觀ル、
 ○八月熊澤了介歿ス、蕃山ト號ス、幼ニメ池田光政ニ事
 フ、光政其材幹ヲ愛シ、弱冠ナル比ヒ、大ニ之ヲ用ントス、
 辭メ曰、未タ學ヒスト、乃チ京ニ入テ中江藤樹ニ師事シ、

國ニ還テ政ヲ執ル、政績遠近ニ聞ユ、後致仕ノ京師ニ在
 リ、列侯皆之ヲ尊禮シ、學ヲ問ヒ政ヲ咨フ者甚多シ、後江
 戸ニ在リ、上昏忌諱ニ觸レテ古河ニ幽セララル、遂ニ古河
 ニ歿ス、○五年九月、水戸中納言光國、楠正成ノ墓碑ヲ濫
 川ニ建メ、面ニ刻メ曰、嗚呼忠臣楠子之墓、自ラ之ヲ昏シ、
 昔ニ朱之瑜ノ文ヲ彫ス、○七年四月、將軍綱吉奏メ、加茂
 ノ祭典ヲ復シ、年々穀千五百石ヲ納レテ祭資ニ充ツ、後
 醍醐帝ノ時ヨリ、祭典ヲ廢スル者、三百六十年、是ニ至テ
 舊ニ復ス、所謂葵ノ祭是ナリ、○八年十一月、幕府狗廬ヲ
 郊外ニ造リ、悉ク府下ノ狗ヲ収テ之ヲ養ス、初メ將軍世

○東山 八

子ヲ殺ヒ、後ニ嗣ヲ求テ得ス、僧隆光謂テ曰、人ノ嗣ニ之
キハ前世多殺ノ報ナリ、故ニ嗣ヲ求ハルハ生ヲ愛スル
ヨリ善キハ無シ、且殿下丙戌ヲ以テ生ル、戌ハ狗ニ属ス、
尤モ狗ヲ愛ス可シ、於是府下ニ令シテ狗ヲ撫養セシム、
且生ヲ殺スヲ禁ス、鳥獸魚鱉ヨリ虺蛇蝮蝥ニ至ルマ
テ之ヲ殺スヲ得ス、鰻鱧泥鰌ヲ鬻ク者、皆業ヲ失フ、已
ニメ微物ヲ殺メ刑ニ遇フ者アリ、狗ヲ殺メ死ニ抵ル者
アリ、士民皆之ヲ苦ム、是ニ至テ廬ヲ造テ之ヲ養フ廬ノ
大ナ方一里、狗數萬頭、日一食フ所ノ米數百斛、吏ニ命メ
之ヲ監セシム、信々食ヲ争ヒ吠聲數里ニ聞ユ、中納言光

國營中ニ在テ老中阿部正武ニ謂テ曰、凡ソ人罪アル者
ハ死ヲ免レヌ、況ヤ犬類ヲヤ、故ニ狂犬ノ人ヲ傷ル者吾
命ヲ之ヲ扑殺スト、正武答ルテ曰、ハス、○十一年七月、將
軍奏請、柳澤保明ヲ左近衛少將ニ任シ、老中ノ首坐ト
為シ、偏名ヲ與ヘテ吉保ト改ム、保明館林ヨリ仕ヘテ近
侍タリ、連リニ封ヲ益シ、列侯ト為ル、初メ牧野成貞亦々
館林ヨリ從テ入り、綱吉之ヲ親信シ、側衆ヨリ累遷シ、老
中ト為リ、封ヲ益メ八萬石ニ至ル、威權比無シ、已ニ保
明カ勢已レニ迫ラントスルヲ知リ、疾ト稱シ、致仕ス、於
是保明獨リ政ヲ專ラニシ、寵任日々盛ニシ、綱吉數々其

國史要略 卷十三 東山 九

邸ニ過リ賜家人ニ及ヒ夫人姫妾皆出テ宴ニ侍ス是
ニ至テ威望大老ノ如ク權内外ヲ頌ク大小ノ侯伯其門
ニ候ニサレ者無シ○十三年十二月水戸中納言光國卒
ス光國英明仁恕學ヲ好ミ士ヲ愛シ尤モ義ヲ重ニス一
藩皆之ニ化ス嘗テ舊史ノ闕文ヲ慨シ奏請メ歷朝ノ實
録ヲ編修シ大日本史ト曰フ又禮儀類典ヲ撰次ノ之ヲ
朝廷ニ献ス其他著書甚多シ彰考館ヲ置テ四方ノ名儒
ヲ延ク最モ朝廷ヲ尊崇シ嘗テ寬文帝ノ敕ヲ奉メ鳳足
硯ノ銘ヲ作テ之ヲ上レ天使江戸ニ至レ毎ニ親藩皆使
者ヲ其館ニ遣テ之ヲ謝ス光國謂フソ是天朝ヲ敬スレ

所以ニ非スト乃チ自ラ其館ニ詣テ之ヲ謝ス攝家大臣
ノ至レモ亦然リ後チ久慈郡ノ西山ニ棲遲シ淡泊自ラ
樂ム卒スル年七十二私ニ謚ノ義公ト曰フ○十四年正
月僧契冲歿ス冲攝津ノ人和歌ヲ善シ萬葉ノ古風ヲ倡
フ源光國其國學ニ精シキヲ聞テ萬葉集ヲ註セシム代
匠記ト名ツク國朝復古ノ學契冲ヨリ起レ○三月十四
日内匠頭淺野長矩營中ニシテ吉良義英ヲ擊テ之ヲ傷ツ
ク大不敬ニ坐シ死ヲ賜フ初メ天使ノ江戸ニ至レ幕
府長矩及ヒ伊達宗春ヲメ接伴タラシメ義英其禮ヲ掌
レ義英貧ニシテ厭クテ無ク長矩カ贈遺ノ厚カラサルヲ

○東山

啣テ之ヲ指授セス、長矩悟ラス、屢々饗禮ヲ問フ、答ヘ
 ス長矩怒ル、是日天使城ニ入ル、長矩又之ヲ問フ、義英應
 セス且之ヲ面辱ス、長矩憤怒ニ堪ヘス、刀ヲ拔テ之ヲ擊
 ツ、梶川典三兵衛之ヲ抱持シ、義英創ヲ蒙テ死セス、即日
 長矩ニ死ヲ賜ヘ、尋テ其封赤穂ヲ奪フ、○十五年十二月
 十四日ノ夜赤穂ノ遣臣大石良雄等四十七人、吉良義英
 ヲ本所ノ邸ニ擊テ之ヲ殺シ、其主ノ仇ヲ報ス、初ノ良雄
 赤穂ニ在テ、江戸ノ變ヲ聞キ群臣ヲ城中ニ會ス會スル
 者三百餘人、良雄衆ニ謂テ曰、主辱ラレレハ臣死ス、我輩
 固ヨリ此ニ死ス可シ然レ介弟大學君在リ、以テ先君ノ

祀ヲ存ス可シ、幕府若シ許サスハ諸君ト共ニ城ヲ枕
 ニシテ死セン耳、大野九郎兵衛曰、是レヒヲ要スルナリ、
 一ツヒ叛名ヲ得ハ、永ク先君ヲ辱メシ、良雄曰然ラス、士
 ノ重スル所ハ義ノミ、今大節ニ臨テ死ヲ畏レ苟モ免レ
 不義是ヨリ甚キハ無シ天下必ス言シ、赤穂人無シト大
 野從ハス、原元辰大ニ怒リ、大野ヲ叱メ之ヲ却ク、大野遂
 ニ逃計ヲ為ス、衆多ク之ニ從フ、再ヒ會議スルニ及テ會
 スル者五十五人、乃チ共ニ血刺ノ死ヲ誓フ、因テ多川月
 岡ノ二子ヲ江戸ニ遣テ其祀ヲ存セシメテ請ハシム、果
 サス、已ニノ受城ノ公使至ル、良雄衆ニ諭メ曰、諸君今國

國史

卷十三

○東山

十一

ヲ去ルモ豈更ニ死所無ランヤ、衆其意ヲ曉テ退ク、良雄
 即チ城ヲ致シ、又公使ニ因テ嗣ヲ立ンコトヲ請フ、公使諾
 ノ去ル、堀部武庸等江戸ヨリ至リ、亦城ニ死セント請ス、
 良雄徐カニ之ヲ諭ス、亦其意ヲ悟テ罷ム、於是良雄京師
 ニ往テ山科ニ居リ、衆皆名ヲ変メ三都ニ隠レ、密カニ復
 仇ヲ謀ル、明年吉田兼亮ヲ江戸ニ遣リ、年少ヲ撫安シ輕
 擧ヲ戒メ、又諸士ヲノ商賈ノ状ヲ為シテ仇家ヲ伺ハシ
 ム、仇家嚴ニ警備ヲ設ケ、且ツ已レヲ伺フト聞テ佯テ游
 蕩無頼ノ状ヲ為メ、妓家ニ沉醉シ、傭夫、櫻蒲ス、仇家之
 ヲ聞テ、防備遂ニ懈レ、七月、幕府大學長廣ヲ安藝ニ禁錮

スト聞テ、意ヲ決メ事ヲ舉ク、因テ又同盟ノ誠偽ヲ試ム、
 逃ル者十餘人、乃其忠誠確乎タル者ヲ擇テ計ヲ告ケ、
 相次テ江戸ニ赴キ十月良雄亦至ル、日夜仇家ノ動靜ヲ
 偵察シ、遂ニ此月十四日ヲ以テ期ト為ス、此夜諸士堀部
 金丸ノ宅ニ會シ、張飲夜分ニ至リ、各鎧甲ヲ裹シ、韋服ヲ
 着ケ、救火丁ノ状ヲ為シ、長梯大槌ヲ持シ、弓槍ヲ荷ヒ、隊
 ヲ分テ二ト為シ、進テ義英ノ邸ニ至ル、此夜天大ニ雪フ
 リ、街衢靜然、乃チ前後ノ門ヨリ入り、大ニ呼テ曰、淺野氏
 ノ遺臣、主ノ仇ヲ報ス禦ク者ハ出ヨ、舉邸驚愕出ル者無
 シ、衆先ヲ争テ突テ入り、槌ヲ以テ戸ヲ破レ、禦ク者ハ之

ヲ斬リ、遁ル、者ハ追ハス、進テ寢室ニ入ル、義英父子已ニ逃ル、諸士大ニ索メ、遂ニ厨傍ノ小室ニ獲テ之ヲ誅ス、子義固終ニ出テス、良雄乃チ衆ヲ率テ泉岳寺ニ赴ク、途ヨリ兼亮及ヒ富次正因ヲ、大目付ノ宅ニ遣テ、連名ノ書ヲ呈メ罪ヲ請ハシメ、天明泉岳寺ニ至リ、義英ノ首ヲ長矩ノ墓前ニ供シ、香ヲ焚テ羅拜ス、良雄乃チ長矩賜フ所ノ短刀ヲ出シ、其首ヲ撃ツ者三タビ、衆皆拜泣ス、已ニノ幕府良雄等ヲ召メ狀ヲ訊ヒ、之ヲ越中守細川綱利、隱岐守松平定直、甲斐守毛利綱元、監物水野忠之ノ第三分チ拘メ、明年二月四日遂ニ自盡ヲ賜フ、衆皆欣然トシ死ニ

就ク良雄遺命ノ長矩ノ墓側ニ葬ル、都下之ヲ聞テ往テ其墓ヲ拝スル者雲ノ如ク、寺門市ヲ成ス、將軍綱吉左右ニ謂テ曰、赤穂ノ諸士、忠烈匹無シ、之ヲ殺ス固ニ惜ム可シ、殺サ、レハ法ヲ廢ス、國家ヲ有ツ者、何ソ苦心ナルト、衆死スルニ及テ、或細川綱利ニ謂テ曰、衆第中ニ死ス、請フ之ヲ被除セン、綱利曰、不可ナリ、忠義ノ靈ヲメ吾家ヲ護セシメン、後ニ朝鮮ノ使者來聘シ、良雄等カ事ヲ聞テ曰、臣有ル、此ノ如シ、其君知ル可シ、○十六年十一月廿二日、曉江戸地大ニ震ス、城郭邸宅皆壞レ、又災ヲ發シ、死者甚メ多シ、小田原尤モ甚メ、箱根山崩ル、大震、後猶盡

夜動シテ六七十年、明年ニ至テ止ム、開府以來ノ無キ所ナ
リ、○先是將軍奏メ先皇ノ諸陵ヲ修メ、是歲成ル、記傳ニ
考ヘ父老ニ問ヒ兆域ヲ正ス者廿五所、其餘詳ナラサル
者猶多シ、初メ細井知慎、古來山陵ノ荒廢スルヲ久クメ
民或ハ其上ニ樵牧スルヲ歎シ、之ヲ柳澤吉保ニ建白シ、
吉保之ヲ將軍ニ啓ス、故ニ此舉アリ、知慎廣澤ト號シ、善
昏ヲ以テ著ルト雖モ文武ノ材幹アリ、昏名其器ヲ掩メ、
赤穂遺臣ノ義舉ニ與テカアリ、堀部武庸ト共ニ劔ヲ堀
内正春一客四傑ニ學フ、故ニ武庸ト尤モ親善、武庸具サ
ニ其謀ヲ告ク、知慎諸士ノ事成ラサレハ火ヲ縱ツ、約

アルヲ知リ、夜ル屢ニ屋ニ登テ之ヲ望ミ、終宵寢キス、其
義氣ヲ以テ相許ス、此ノ如シ、○寶永元年十二月、將軍甲
府參議綱豊ヲ立テ、世子ト為シ、西城ニ居ラシメ、名ヲ
家宣ト改ム、○家宣西城ニ入ルニ及テ、將軍柳澤吉保ヲ
甲斐ニ封ハ、十五萬石ト為ス、故事ニ甲斐駿河ハ將軍ノ
親族ニ非レハ封スルコトヲ得ス、吉保特命ヲ以テ封ヲ受
ク、人皆之ヲ異トス、初メ吉保謀ル所アリ、將軍已レカ第
ニ臨ム、毎ニ其愛妾ヲ出メ、宴ニ侍シ、將軍ニ近ツカシム、
已ニノ男安暉ヲ生ム、吉保常ニ謂フ、安暉已レニ類ヒス
ト、既ニ長ス人或ハ其師傅ヲ置ンコトヲ勸ム、吉保曰、安暉

ハ吾カ訓戒スル所ニ非ス、人益々之ヲ疑フ、吉保入テ讒
 間ニ侍シ、密カニ安暉カ將軍ニ類スルヲ微言ス、將軍拒
 マス、曰、或ハ然ラン、於是屢々之ヲ内廷ニ召シ、名ヲ吉
 里ト改メ、入テ見ル、毎ニ飲食及ヒ金帛器玩ノ賜甚多シ、
 列族以下之ヲ敬禮シ、問遺日々其門ニ滿ツ、吉保封ヲ甲
 斐ニ受ルニ及テ人皆曰ク、將軍ノ吉保ヲ封スル其子ヲ
 封スル所以ナリト、○二年三月京師ノ儒伊藤維楨歿ス、
 維楨字ハ原佐、仁齋ト號ス、初ノ宋儒ヲ宗トシ、後頗ル之
 ヲ疑ヒ、漢唐ノ訓詁ニ從テ古學ヲ倡メ、之ニ繼テ荻生茂
 卿モト古文辭ノ學ヲ江戸ニ倡メ、程朱ヲ排斥ス、復古ノ學海

内ヲ風靡ス、仁齋ノ五子皆儒雅ヲ以テ稱セラレ、長子東
 涯尤モ博覽強識、○三年七月幕府根津ノ祠ヲ改造ス、其
 祠ハ根津宇右衛門ヲ祭ル、根津ハ故ノ甲府中納言綱重
 ノ臣ナリ、綱重驕縱酒ニ沉湎ス、根津數々之ヲ諫レ、凡聽
 カス、一日綱重カ杯ヲ舉ルノ手ヲ扼メ、之ヲ諫争ス、綱重
 大ニ怒テ之ヲ手刃ス、既ニメ復々飲ム、根津カ猶手ヲ扼
 ノ争ヲ見ル、綱重大ニ驚キ悔ム、之ヲ廟祀ス、綱重ハ世子
 家宣ノ父ナリ、故ニ世子請テ之ヲ改造ス、○四年十月四
 日、畿内東海地大ニ震ス、地裂ケ海溢ル、十一月廿三日、富
 士山火ヲ發シ、震動ノ聲大雷ノ如ク、灰沙ヲ雨ラシ、天色

晦冥、白昼燭ヲ執ル、府下ノ人大ニ怖ル、廿八日ニ至テ止
ム、江戸、山ヲ去ル、三十里、灰積ム、一尺、伊豆相摸駿河
ノ地、灰積ム、一丈餘、山腹沙走ノ口ニ一山ヲ噴出ス、俗
ニ寶永山ト稱ス、幕府諸藩ニ課メ、武相豆駿ノ窮民ヲ賑
ハシ、又大ニ役ヲ興メ、積灰ヲ除カシム、其深厚ニ除ク
可ラサル者ハ皆不毛ト為ル、○五年三月、京師大ニ災ス、
禁宮及ヒ公卿ノ邸、市民ノ屋延焼スル者二萬餘戸、六月
幕府皇宮ヲ造ル、諸侯ヲノ役ヲ助ケシム、○六年正月、征
夷大將軍綱吉薨ス、年六十四、贈官前代ノ如ク、常憲ト謚
ス、綱吉正ニ柳澤吉里ヲ愛シ、視ル、子ノ如シ、又吉保ノ

請ニ從テ駿河ヲ併セ封シ、其寵姫某氏ヲノ吉里ヲ養テ
子ト為セシメ、職ヲ辭メ、共ニ北城ニ居リ、吉里ノ養ヲ享
ント欲ス、五年命メ北城ヲ築カシメ、細川綱利役ヲ助ク、
於是吉保以為ラク、吾事成レリト、將軍ノ夫人藤原氏側
カニ其議ヲ聞テ大ニ之ヲ憂メ、諫テ益ナキヲ知リ、潛カ
ニ親藩及ヒ諸老ト議スル所アリ、冬將軍麻疹ヲ患ヘ、是
年正月疾愈ユ、乃チ甲斐駿河百萬石ヲ以テ吉保ヲ封シ、
又其親姻ノ諸侯ノ封ヲ益メ、之カ羽翼ト為ス、議定ツテ
命下ル、十日有リ、十日將軍暴カニ薨シ、夫人藤原氏亦薨
ス、或ハ曰、十一日ヲ以テ命ヲ下サントス、藤原氏之ヲ知

リ、期ニ先ツテ一日、將軍ノ起居ヲ候人ルニ因テ之ヲ刺シ、夫人モ亦及ニ伏テ薨ス、老中近臣ト相議シ、夫人ノ喪ヲ秘シ、二月ニ至テ之ヲ發スト云フ、夫人ハ、関白鷹司房輔ノ女ナリ、薨ス年五十二、○家宣職ヲ繼ク、本城修理ノ事アルヲ以テ西城ニ在テ政ヲ聽キ、十二日、柳澤吉保ヲ黜ケテ其職ヲ免シ、北城ノ役ヲ罷メ、尋テ前代ノ諸近侍ヲ黜ケ、當十錢ヲ停メ、狗廬ヲ毀テ盡ク之ヲ放チ、殺生ノ禁ヲ廢シ、其他下ニ便ナラサル者皆之ヲ改ム、○四月、詔メ源家宣ヲ以テ征夷大將軍ト為シ、内大臣ニ遷リ、正二位一叙ス、○六月、天皇位ヲ皇太子ニ禪ル、寶永六年、十二

月十七日崩ス、壽三十五、

○中御門天皇 諱ハ慶仁

東山天皇第五ノ皇子ナリ、母ハ新崇賢門院藤原氏、○六月天皇踐祚ス、年甫テ九歳、關白家熙攝政タリ、十一月即位ノ禮ヲ行ス、將軍家宣、式部大輔、神原政祐等ヲ遣テ即位ヲ賀ス、○是年白幽子没ス、年二百餘歳、何ノ所ノ人ナルヲ知ラス、京師白川山ノ石室中ニ居リ、常ニ金剛經ヲ誦ス、駿河ノ僧某、嘗テ之ニ過リ養生ノ訣ヲ受テ一畝ヲ著ス、夜船閑話ト云、石川丈山亦之ニ八分ノ法ヲ學フト云、○七年、玩球ノ使者来リ貢ス、○將軍家宣學ヲ好シ、新

井君美ヲ親任ス又三宅緝明室直清ヲ召メ侍講ト為ス
君美ノ薦ル所ナリ緝明觀瀾ト號シ直清鳩巢ト號ス君
美藩邸ヨリ從テ寵任ヲ受ケ筑後守ニ任シ遂ニ大政ニ
參與ス○正徳元年朝鮮ノ使者趙大億等來聘シ將軍ノ
繼職ヲ賀ス幕府新井君美ヲメ接伴タラシム君美前代
ノ禮ヲ草ノ饗筵ニ雅樂ヲ用ヒ男女路ヲ異ニスルカ如
キ皆其建議スル所又大億ト禮文ヲ争ヒ大億屈服シ反
テ君美ノ英邁ヲ嘆賞シ詩ヲ以テ之ヲ稱揚ス君美經史
ヲ精究シ和漢ノ典故通曉セサルヲ無シ又西洋ノ事實
ヲ考究ス本朝洋學ノ興ル實ニ君美ニ胚胎ス著ハス所

ノ各百六十餘種皆有用ノ書ナリ○二年征夷大將軍家
宣薨ス年五十一贈官前代ノ如シ文昭ト謚ス子家繼嗣
ク甫テ四歳家宣游獵ヲ好マス政吏ノ暇諸儒ニ經ヲ講
セシメテ之ヲ聽ク又冠服ヲ改メ古俗ニ復ヒント欲シ
君美ヲノ其儀ヲ考定セシム薨スルニ遇テ果サス○三
年家繼ヲ以テ征夷大將軍ト為シ内大臣ニ遷ル○四年
幕府月光夫人勝田氏家繼ノ生母ノ侍女江島溜行ノ事露ハレ
信濃高遠ニ放タル又女輩數十人ヲ放ツ私姦ニ坐セラ
ル者數十人皆罪ヲ得タリ時ニ將軍幼若聞闈ノ禁大
ニ弛ムト云○五月貝原篤信歿ス篤信字ハ子誠益軒ト

號ス、黒田氏ノ儒臣ナリ、著唇甚ク多ク、皆後人ニ裨益アリ、○享保元年四月、將軍源家繼薨ス、年八歳、贈官前代ノ如ク、有章ト謚ス、源頼宣ノ孫吉宗紀伊ヨリ入テ職ヲ継ク、家繼ノ薨スルヤ、諸老繼嗣ノ支ヲ會議ス、水戸中納言綱條、吉宗ヲ立ント欲ス、吉宗固ク辭ス、時ニ内廷モ亦之ヲ議ス、或ハ曰、館林侯清武宜シク立ツヘシ、月光夫人曰、紀侯賢明ニシ、且東照公ノ曾孫也、之ヲ立ルニ若カス、問部詮房中ニ在テ事ヲ用ユ、亦以テ然リト為シ、乃チ綱條等ニ命ノ之ヲ迎ヘシム、吉宗辭スレモ聽カス、遂ニ入テ繼ク、○七月詔ノ源吉宗ヲ以テ征夷大將軍ト為シ、内

大臣ニ遷ス、吉宗聰明勇決、職ヲ継テ猶喪ニ居ルモ命ノ城中ノ四脚門ヲ毀タシム、衆姑ヲク之ヲ置ンテ請フ、吉宗曰、先代ノ過チハ、改ルヲ以テ孝ト為ス、一日之ヲ置ク、是一日ノ過チヲ重ルナリト、速ニ之ヲ毀タシム、其僭上ヲ畏ル、也、○吉宗藩ニ在ルモ、伊勢山田ノ民ト紀伊ノ民ト事ヲ争テ訟フ、紀州ノ民曲ナリ然レモ山田奉行其宗藩ヲ憚リ訟久シク決セズ、大岡忠相^ス山田奉行タルニ及テ、速ニ其曲直ヲ決ス、山田ノ民大ニ悦ブ、吉宗其公直ヲ知リ、職ヲ襲クニ及テ、忠相ヲ召メ、江戸ノ町奉行ト為ス、訟獄平允、果々其職ニ稱ヒ、人欺クヲ得ス、皆神明

ト稱ス、今ニ至ルマテ、兒童モ大岡ヲ知ル吉宗又屢々諸
 吏ヲ召シ見テ、其能否ヲ試ミ、之ヲ進退ス、故ニ諸吏互ニ
 勉勵メ職ヲ曠フスル者ナシ、○三年十二月、初メ常憲ノ
 時、諸陵ヲ修ム、然レモ遺ス所猶多シ、將軍命メ又之ヲ脩
 メシム、是ニ至テ成ル、○四年、朝鮮ノ使者來聘メ、將軍ノ
 繼職ヲ賀ス、幕府文昭ノ時ノ饗禮ヲ改テ、皆舊制ニ遵フ、
 韓使之ヲ稱メ曰、將軍賢明ナリト、初メ新井君美ノ事ヲ
 用ル、多ク制度ヲ改メテ欲ス、吉宗其作ス所ヲ喜ヒス、以
 為ラク、文縉ニ過クト、一切廢メ用ヒス、秋、前田綱紀、庶物
 類纂三百六十卷ヲ幕府ニ獻ス、稻生若水ノ著ハス所、若

水本草ノ學ニ精シ、○六年四月、吉宗吹上廳ニ於テ三奉
 行以下ノ訟獄ヲ決スルヲ聽ク、三家老中等皆從フ、八月
 新タニ匭ヲ評定所ノ前ニ置キ、昏ヲ投セシメテ、寃ヲ訟
 へ茲ヲ告ケシメ、且直言ヲ求ム、處士山下廣内、諫卷一巻
 ヲ投ス、廣内ハ兵家者流ニメ其言取ル可キ無シ、然レモ
 吉宗之ヲ嘉メ賞スルニ白金ヲ以テス、○吉宗經解七百
 廿冊、康熙字典四十冊ヲ朝廷ニ獻ス、蓋始テ舶來スル所
 ナリ、○七年五月上皇、靈元帝本朝世記四十六冊ヲ吉宗
 ニ賜フ、六月、吉宗禮儀類典五百十五冊ヲ上皇ニ獻ス、又
 六諭行義大意ヲ府下ノ塾師ニ頒テ、兒童ニ教ヘシム、室

直清ノ諱スル所ナリ又直清ニ命ノ五常名義五倫名義ヲ撰テ童輩ノ字帖ニ便ナラシム○九年先是吉宗前代奢靡ノ弊ヲ矯ント欲ス儉薄自ラ奉シ執政以下近侍ニ至ルマテ皆粗衣ヲ着テ登營セシム是ニ至テ又婦人衣服筭簪ノ制ヲ定メ山王神田兩祠ノ祭儀華麗度ニ過ルヲ禁シ贈遺ノ度ヲ定ム○九月幕府山田正朝ヲ召テ營中ニ於テ經ヲ講セシム吉宗大ニ嘆賞シ俸二百石ヲ賜フ正朝時ニ年十三乃チ牋ヲ上ツテ之ヲ謝ス其文老成人ノ如シ正朝ハ幕府ノ醫員正芳ノ子ナリ學ヲ伊藤東涯ニ受テ穎悟夙成人呼テ神童ト為ス室直清亦タ天

下第一ノ才士ト稱ス惜カ十年二十四痘ヲ病テ歿ス○是歲柳澤吉里ノ封ヲ都山ニ移シ甲府ニ城代ヲ置ク○十年三月吉宗小金原ニ獵ス初ノ綱吉生ヲ殺ストテ禁シ家宣游田ヲ好マス是ヲ以テ田獵久ク廢ス吉宗謂ヘラク田獵ハ盤樂ノ為ニ非ス武ヲ講ヌルヲ以テ主トナスト屢々游獵ス是ニ至テ大ニ小金原ニ獵シ諸士ヲ振勵ス又屢々麾下ノ士ヲ召テ武技ヲ演セシメ賞スルニ金帛ヲ以テシ柳生小野山水山名等刀槍ノ妙ヲ以テ府下ニ著ハル吉宗數々之ヲ召ス又南都寶藏院ノ僧槍法ヲ善クスト聞テ召テ其技ヲ觀ル於是麾下ノ士劔槍ヲ

馬ニ長スル者、齋々トノ輩出ス、又騎射ノ法久ク廢スル
ヲ嘆シ、諸家ノ舊記ニ參考ノ其法ヲ定メ、諸士ヲ之ヲ
學ハシム、已ニノ麾下騎射ニ妙ナルモノ千ヲ以テ數フ
小笠原孫九郎、酒井與左衛門、吉野左仲、多門多宮、土岐大
學、日賀田長門守等、其撰メ、百發百中ノ良手ナリ、○十三
年四月、吉宗萩生茂卿ヲ召テ之ヲ見ル、先是茂卿屢々命
ヲ受テ群臣ヲ校シ賞賜アリ、又政治ノ要ヲ下問ス、茂卿
乃チ政談ヲ撰テ之ヲ献ス、茂卿豪才博洽、其名天下ニ夷
ク、是ニ至テ之ヲ召ス、特命ニ出ルナリ、吉宗儒士ヲ重シ
シ、凡ソ其施行スル所、必ス室直清ニ問ス、直清乃チ其諸ヲ

古典ニ徵シ進言ス、於是之ヲ行フ、敢テ私意ヲ以テ行ハ
ス、○十三年、幕府救火丁ヲ街市ニ置ク、伊呂波ヲ以テ號
ト為ス、今ニ至テ依然タリ、○四月、將軍日光廟ニ謁ス、途
ヨリ人ヲ遣テ、足利學校ノ藏卷ヲ檢閲セシム、○十六年
四月、享保壬寅ヨリ比年豊穰ニシテ、米價益々賤シ、是ニ至
テ斛ノ價銀廿六錢、百姓段富ナリ、明年復西南ノ諸道大
ニ蝗アリ、西海山陰山陽尤モ甚シク、民大ニ飢ユ、十八年
ニ至テ西南諸道益々飢ニ、餓死スル者十六萬九千餘人、
幕府大ニ倉廩ヲ發テ之ヲ賑卹ス、是ニ至テ斛米ノ價、銀
二百錢、先是琉球甘薯ヲ薩摩ニ貢ス、長崎モ亦之ヲ舩

得タタリ、是年甘薯ニ頼テ飢ヲ免ル、者甚タ多シ、○十
九年四月、大將軍吉宗、敕ヲ奉メ、禮儀類典五百十三卷ヲ
献ス、天皇光國以來、カヲ撰述ニ竭ス、トヲ喜メ、褒賞ヲ下
ス、○二十年三月、天皇位ヲ皇太子ニ禪ル、元文二年、四月
十一日崩ス、壽三十一

○櫻町天皇 諱ハ昭仁

中御門天皇第一ノ皇子也、母ハ新中和門院藤原氏、○三
月、天皇踐祚ス、年十六、前太政大臣家久、関白タリ、十一月
即位ノ禮ヲ行フ、將軍掃部頭井伊直定等ヲ遣テ、即位ヲ
賀ス、○十一月、細井知慎歿ス、知慎、遠江ノ人、次郎太夫ト

稱ス、初ノ柳澤吉保ニ事ヘ、後幕府ノ昏記ト為ル、靈元上
皇嘗テ其書ヲ覽テ欣賞シ、内旨ヲ以テ、惟南献壽ノ四字
ヲ昏セシム、旨ニ稱フ、菅原長義ヲ以テ褒詔ヲ昏セシム、中
ニ字様奇勝、勲賞不淺ノ語アリ、知慎感戴シ、奇勝堂ト號
スト云、○幕府養生所ヲ小石川ニ置キ、窮民ヲ療養ス、○
元文二年五月、東海疫行ハレ、犬狼狐狸亦タ多ク死ス、人
及ヒ牛馬之カ為ニ噬ル、トハ皆死ス、諸方効無シ、一醫
アリ、土伏苓、川芎、甘草ノ三味ヲ以テ之ヲ治ス、皆愈ユ、○
五年三月、敕使大納言為久、大納言頼胤、江戸ニ至ル、將軍
命ノ之ヲ隅田川ニ饗ス、麒麟丸大竹丸ノ船ヲ没ヘ、船中

宴ヲ張り、魚ヲ網シ、茶亭ヲ木母寺ニ設ケテ、又此ニ讌ス、
春色駘蕩、兩岬大ニ悅テ各歌ヲ詠ス、成島道筑等陪游シ、
道筑之ヲ記ノ春ノ御船ト稱ス、○十一月、吉宗其第四子
宗尹^{マサノブ}カ弟ヲ一橋ニ置ク、宗尹中將ニ任シ、一橋家ト稱ス、
○寛保元年、幕府ノ士、木村彌十郎高敷^{タカノブ}武徳編年集成ヲ
撰テ成ル、○二年、幕府ノ儒臣青木文蔵^{アヲキ}、甘薯^{カンショ}ノ種ヲ薩摩
ヨリ取り、其著ハス所ノ蕃薯考ヲ併セテ之ヲ海鳴及ヒ
東海ノ諸國ニ頒ツ、諸民及ヒ鳴ノ流人皆其利ヲ蒙ル、世
稱ノ甘薯先生ト曰フ、先是新井白石和蘭ノ學ヲ闡キ、未
タ世ニ行ハレス、文蔵尋テ之ヲ倡ヘ、嘗テ長崎ニ往キ、譯

官ニ就テ、蘭書ヲ質シ、洋字ヲ習ヒ、カテ其學ヲ知ム、於是
蘭學漸ク行ハレ、後來之ヲ唱ル者相踵テ起ル、○延享元
年、幕府甘蔗^{カンショ}ノ苗ヲ外船ニ獲テ之ヲ種シム、本朝ノ砂糖
ヲ製スル斯ニ始ル、○二年九月、大將軍吉宗職ヲ辞ス、○
十月、權大納言源家重ヲ以テ、征夷大將軍ト為シ、内大臣
ニ遷シ、正二位ニ叙ス、○四年五月、天皇位ヲ皇太子ニ禪
ル、天皇聰敏ニシテ恭謹、尤モ祖先ヲ敬ス、新嘗祭、寛正以來
廢セリ、帝之ヲ行ヒ、又宇佐檀^{カシビ}日ノ奉幣ヲ復シ、大嘗祭ヲ
興復ス、是ヨリ世々闕クルヲ無シ、豊明^{トヨアカリ}ノ節會亦々舊式
ニ復ス、寛延三年、四月廿三日崩ス、壽三十一、

○桃園
北四

○桃園天皇 諱ハ遐仁

櫻町天皇第一ノ皇子ナリ、母ハ開明門院藤原氏、○五月
天皇踐祚ス、年甫テ七歳、関白道香攝政タリ、九月即位ノ
禮ヲ行フ、幕府和泉守藤堂高豊等ヲ遣テ、即位ヲ賀ス、○
十月先是丹波正伯、幕命ヲ受テ續庶物類纂ヲ撰ス、是ニ
至テ成ル、六百三十八卷、補篇五十四卷、以テ稻生若水ノ
正編ヲ補フ、合メ一千五十四卷、朝鮮人之ニ序メ、曠代ノ
寶典ト稱ス、○寛延元年、朝鮮ノ使者來聘シ、江戸ニ來テ
將軍ノ繼職ヲ賀ス、十二月琉球ノ使者亦來リ賀ス、○十
二月幕府奏ノ越前守大岡忠相ヲ以テ列侯ト為ス、忠相

獄ヲ決スル、神明ノ如ク、下ニ冤民ナシ、是ニ至テ又衆吏
決シ難キノ事ヲ決ス、切ヲ以テ列侯ト為ス、○寶曆元年
六月、右大臣前征夷大將軍源吉宗薨ス、贈官前代ノ如ク
有徳ト謚ス、有徳儉素ヲ尚テ士風ヲ勵シ、驕奢ヲ抑テ國
本ヲ厚フシ、文武ヲ振起シ、教化大ニ行ハレ、吏其職ニ稱
ヒ、民其業ヲ安ニス、稱ノ中興ノ英主ト為ス、○六年、五月
幕府奏ノ大岡忠光ヲ以テ列侯ト為シ、岩槻ニ封ス、忠光
父祖ヨリ番士タリ、後小性組ニ進ミ、家重之ヲ寵シ、遂ニ
側用人ト為ル、家重頗ル聲色ニ耽リ、酒ヲ病テ、語言濇訥、
了マ可ラス、忠光獨リ其意ヲ解ス、家重曾テ後園ニ游フ、

左右ヲ顧テ言ス、左右解セズ、走テ忠光ニ告久、忠光曰、衣
ヲ奉セヨ、殿下必ス風ヲ惡ムナリ、乃チ之ニ從フ、果ノ欣
然タリ、故ニ忠光一日モ左右ヲ離レズ、命ヲ執政以下ニ
下ス、忠光代テ之ヲ傳フ、執政以下事ヲ啓スル亦忠光ニ
因テ之ヲ言フ、直月畢レハ必ス酒肴ヲ忠光ニ贈テ之ヲ
謝ス、忠光威權自ラ熾ンニ、贈遺門ニ滿ツ、其家計十萬石
ニ比ス、是ニ至テ遂ニ列侯タリ、二万五千石、出雲守ニ任
ス、然レモ謹慎身ヲ終フ、家重、又田沼龍助ヲイソツ意次、稻葉富之
助、正明ヲ寵シ、後チ皆威權アリ、○八年、權大納言光胤キハラ權
大納言公城キハラ左中辨資望以下ノ公卿十七人罪アリ、其官

爵ヲ削テ之ヲ禁錮ス、寶曆ノ初ノニ丹州ノ處士、竹内式
部ナル者、京師ニ來テ教授ス、業ヲ受ル者多ク、遂ニ縉紳
ノ宅ニ出入シ、昏ヲ講シ、諷諭スル所アリ、公卿其言ヲ喜
ヒ、遂ニ非望ノ志ヲ生シ、射ヲ學ビ馬ヲ馳セ、日ニ武事ヲ
講ス、已ニノ事露ハレ、乃チ貶黜セラレ、式部ヲ執ヘテ江
戸ニ送り、之ヲ問訊ス、罪死ニ至ラス、之ヲ逐ス、○十年、四
月、大將軍家重職ヲ辞ス、○七月、源家治ヲ以テ征夷大將
軍ト為シ、内大臣ニ遷シ、正二位ニ叙ス、○十一年、六月、前
大將軍家重薨ス、贈官前代ノ如ク、惇信ト謚ス、惇信多病
ニ朝ヲ廢シ、群臣見ルヲ得ス、侍御ノ臣、吐納ヲ主リ、

因循恒々為ル、初メ有徳薨スルニ臨テ、館林侯松平武元
ヲ實ハ水戸ノ支封松平頼明ノ子召シ、囑スルニ後事ヲ
館林ヲ繼キ右近將監ニ任ス、
ヲ以テス、武元嚴毅方正、繼テ老中タリカヲ竭メ匡救ス、
故ニ博信ノ世、群小中ニ在ト雖、氏放肆スルヲ得ス、天
下頼テ以テ安シ、○十二年七月十二日、天皇崩ス、壽二十
二、

○後櫻町天皇 諱ハ智子

櫻町天皇第二ノ皇女ニノ桃園天皇ノ皇姉ナリ、母ハ皇
太后青綺門院、○七月天皇踐祚ス、年二十三、關白内前攝
政タリ、明年十一月即位ノ禮ヲ行フ、將軍雅樂頭酒井忠

恭等ヲ遣テ即位ヲ賀ス、○八月法眼山脈尚徳歿ス、尚徳
東洋ト號ス、養壽院女修、後ヲ紹ク、其門人永富鳳助、獨
嘯庵ト號ス、先是後藤達良山ト號シ、首トノ古医方ヲ倡
フ、其門人香川修徳一本堂ト號シ、尋テ吉益周助東洞ト
號シ、皆豪傑俊偉ノ資ヲ以テ、争テ古醫道ヲ倡ヘ、五行分
配ノ腐說ヲ排斥シ、張機ヲ主トス、是ニ至テ本邦ノ醫道
遠ク西土ニ超越スト云、○明和三年、變ヲ幕府ニ上ル者
有リ、處士山縣大貳、藤井右門等、其黨數百人、不軌ヲ謀ル
ト幕府乃チ大貳右門ヲ執ヘ、明年八月獄成テ之ヲ梟シ、
小幡族織田信邦之ニ坐ノ拘セラル、大貳甲斐ノ人博洽

ニノ兵學ヲ善クシ、儒佛陰陽方技ノ學通曉セサルヲ無ク、業ヲ受ル者甚ク多シ、織田信邦ノ老吉田女蕃津田頼母之ト親善、數々相往来ス、已ニメ藤井右門甲州ヨリ來テ大貳ノ家ニ寓ス、右門劍法ヲ善クシ、來リ學フ者亦タ多ク、且竹内正庵ト交リ善シ、正庵ハ往年公卿ニ説テ武事ヲ勸ル者即チ式部ナリ、式部モ亦來リ寓ス、於是衆頗ル其形跡ヲ疑フ、是ニ至テ變ヲ訴フ、幕府乃チ大貳右門ヲ捕テ之ヲ鞠問ス、然レモ反計ノ證ス可キ無シ、唯大城及ヒ甲府ノ城ノ要害ヲ論シ、攻城ノ策ヲ講ス、大ニ禁ニ觸ル、明年八月遂ニ大貳右門ヲ梟シ、正庵ヲ流シ、信邦ノ

封ヲ收メ、其子信浮ヲ立ツ、其餘連坐スル者猶衆シ、大貳嘗テ碑ヲ吾妻森ニ建テ、又詩ヲ甲州カサガハ鰍澤ノ絶壁ニ鑄ス、曰、鰍門遙向駿河通、絶壁懸崖似鬼工、回首千山都北走、扁舟早已到南中、其著ハス所ノ柳子新論、深ク皇室ノ凌遲ヲ慨シ、議論正大、逆ヲ謀ル者ニ非ス、然モ當時ノ勢、幕忌ニ觸ル、ヲ以テ死ヲ免レス、○四年七月、家治主殿頭田沼意次ニ俸ヲ益メ、二萬石ト為シ、遠江相良ニ城テ之ニ居ラシム、意次ノ父意行ハ和歌山ノ小吏ナリ、吉宗ニ從テ入テ近侍ト為ル、意次父ノ官爵ヲ繼テ近侍トナリ、家重及ヒ家治ニ寵セラレ、側用人ニ進シ、宝曆五年、遂ニ列

候ト為リ、此ニ至テ城主ト為ル、家治之ヲ罷スル前代ノ
 過キ、威權稍ク熾ナリ、初メ家治ノ職ヲ繼ク、但馬守秋元
 涼朝老中ト為テ親任セラル、己ニメ家治前代ニ例テ、朝
 ヲ見ル一稀ニ意次及ヒ稻葉正朝中ニ在テ威福ヲ弄ス、
 故吏ニ諸臣營中ニメ執政ニ遇キハ、必ス拜メ過ク、例ナ
 リ、意次嘗テ涼朝ニ遇フ、趨メ拜セズ、涼朝之ヲ同僚ニ告
 テ意次ノ不敬ヲ咎ム、而メ家治問ハス、涼朝諛ヲ畏レテ
 病ト稱ス、人ニ謂テ曰彼カ不敬ヲ咎メサレハ、執政ノ威
 ヲ損ス、乃チ將軍ノ威ヲ損スルナリ、於是職ニ任ヘスト
 稱メ、數ク罷ラレントテ請フ、遂ニ之ヲ許ス、蓋シ涼朝ノ

意、意次ヲ黜ント欲ノ能ハス、カメテ辭職ヲ乞テ之ヲ諷
 ス、家治悟ラス、終ニ意次カ為ニ誤ラル、○六年十月、賀茂
 真淵没ス、真淵遠江ノ人ナリ、荷田春滿ヲ師トシ、國學ニ
 精シ、萬葉ノ古風ヲ倡フ、門人揖取魚彦、荒木田守武、加藤
 守滿、伎並ニ詞學ニ精シ、○七年六月、京師ノ町奉行、土佐
 守石川政武、職ヲ罷テ東ニ歸ル、政武聰敏ニメ、廉直權貴
 ニ屈セス、初京ニ至ルル前、尹ノ決スルヲ得サル三十訟
 アリ、政武曰、吾己ニ奉行ニ任ス、冤ヲ伸ヘテ罪ヲ獲ル畏
 ル、所ニ非スト、一日ニメ之ヲ裁決ス、政武獄ヲ決スル
 一神ノ如ク、衆民悦服ス、然レ田沼意次ノ意ニ忤フヲ以

テ遂職ヲ罷メラル、都民之ヲ惜ミ、送テ石部ニ至リ皆涕
泣ス、先是甲斐守曲淵景漸、大坂ノ町奉行タリ、訟獄平允、
政武ト名ヲ齊フス、○十一月、天皇位ヲ皇太子ニ禪ル、文
化十年閏十一月二日崩ス、壽七十四、

○後桃園天皇 諱ハ英仁

桃園天皇第一ノ皇子ナリ、母ハ恭禮門院一條氏、○十一
月天皇踐祚ス、年甫テ十三歳、左大臣尚實攝政タリ、明年
四月即位ノ禮ヲ行フ、將軍隱岐守松平定靜等ヲ遣テ即
位ヲ賀ス、○安永元年五月、幕府田沼意次ヲ以テ老中ト
為ス、意次罷任益々盛ニ、權内外ヲ傾ク、同列以下、大小

ハ侯伯媚ヲ納レサル者ナシ、獨リ松平武元、三世ノ老中
ナルヲ以テ之ニ屈下セス、意次亦之ヲ敬憚ス、武元卒ス
ルニ及テ意次復々忌ミ憚ル所ナク、天下大小ノ事ミナ
一人ニ決シ、列族以下ノ進退黜陟、賄賂ヲ以テ成リ、公然
トノ之ヲ受ク、大老老中ニ任スル者、亦意次ニ賂テ得ル
所故ニ阿諛從順一語ヲ出サス、群下唯意次アルヲ知
テ將軍アルヲ知ラス、家治画ヲ好ミ、時々画史ヲ召テ
之ヲ觀ル、意次嘗テ謂ヘラク、方今ノ世、人主ヲノ辱ヲ讀
ミ儒生ヲノ近ツカシム可ラス、又外間ノ事ヲ知ラシム
可ラス、若シ前代ノ得失、當今ノ利害ヲ知ル、片ハ我輩勢

ヲ失ハシ、今殿下幸ニ画ヲ好ム之ヲ以テ日ヲ消メ可ナ
リト、乃チ画史榮川養川永徳ヲ薦テ日ニ其側ニ侍セシ
メ、之ヲ官鑿ノ班ニ比ス、又近臣ヲ戒テ、一切外間ノ事ヲ
言フヲ無ラシム、近臣山村良旺読昏ヲ好ミ、常テ三河後
風土記ノ夏ヲ以テ家治ニ聞ス家治之ヲ見ント欲ス、良
旺乃チ宿直コトニ昏ヲ懷ニメ入り之ヲ其前ニ読ム、家
治大ニ悦ビ、服ヲ更ヘ手ヲ拱メ之ヲ聴ク、曰圖ヲサリキ、
世ニ此ノ如キノ書アラントハ意次之ヲ聞テ憚ラス、俄
ニノ良旺出テ、外官ニ補セラレ、於是近臣皆懼レ、敢テ
外事ヲ言フ者ナク、水災飢饉アリト雖モ家治之ヲ知ラ

ス、以為ラク四海無事ナリト、○七月、肥前肥後、筑後大風
海溢ル、八月朔、遠江ヨリ東、武蔵ヨリ西、大風屋ヲ倒ス、二
十一日、美濃ヨリ西、備前ヨリ東、大風樹ヲ抜キ海溢ル、死
者多シ、○三年六月、大風摂津播磨山城近江尤モ甚シク、
大坂海口ノ船皆壊レ、溺死千二百餘人、○五年四月、將軍
日光廟ニ謁ス、○七年三月、伊豆大島ノ三原山火ヲ發シ、
石ノ雨ラス、山上ヨリ山下ノ仲野ノ澤中ニ至テ、石積ム
一ニ丈、其火冬ニ至テ滅セス、○八年二月、幕府ノ世子權
大納言家基薨ス、年十八、初メ市井ノ医ニ池原雲伯ナル
者アリ、巧倭ニノ點智多シ、田沼ノ嬖臣ニ賂テ遂ニ其家

出ハス、意次以テ良醫ト為シ、之ヲ薦テ俸二百俵ヲ賜ヘ、
西城ノ侍醫ト為ス、世子嘗テ疾アリ、雲伯曰、凡ソ人血氣
壅滯スルハ、必ス病ヲ生ス、之ヲ治スルノ法、出游メ其
氣ヲ宣通スルニ若クハ無シ、於是世子數々郊外ニ出遊
ス、是年二月、將サニ目黒ニ放鷹セントス、出ルニ臨テ面
色土ノ如シ、其傳之ヲ止ム、雲伯等聽カス、之ヲ強テ出ッ、
途ニノ疾甚シク、輿ノ歸リ、明日遂ニ薨ス、府下ノ人、貴賤
トナク、嘆惜悲泣シ、市人皆戸ヲ閉テ市ヲ罷ム、時ニ上下
虐政ニ苦シム、世子賢聲アルヲ以テ、早ク其職ヲ繼ニ
テ企望ス、故尤之ヲ惜ム、○四月、三都及ヒ諸國、嚴寒冬ノ

如ク、北陸及ヒ伊勢大ニ雪フル、九月、大隅ノ櫻山大ニ焚
ク、熱砂泥土ヲ噴出シ、灰ヲ雨ラス、雪ノ如ク土佐紀伊尾
張ニ及フ、死スル者一萬六千餘人、田園没スル者甚多シ、
○十月廿九日、天皇崩ス、壽二十二、

○光格天皇 諱ハ兼仁

東山天皇ノ曾孫ニシテ、典仁親王ノ皇子ナリ、○十一月天
皇踐祚ス、年甫テ九歳、關白尚實攝政タリ、明年十二月、即
位ノ禮ヲ行フ、將軍雅樂頭酒井忠以等ヲ遣テ即位ヲ賀
ス、○九年、邦俗古ヨリ皆菅笠ヲ被ル、此ニ至テ民間ニナ
涼傘ヲ用ユ、今ニ至テ廢セス、○天明三年、二月ヨリ四月

二至テ京師江戸及ヒ諸國火災甚々多ク、四月ヨリ六月
ニ至テ畿内嚴寒冬、如ク、人皆綿衣ヲ着ク、京師四條ノ納
涼風雨ヲ以テ都テ廢ス、六月、關東及ヒ諸國風雨洪水、米
價俄ニ踊貴シ、諸民ノ窮困舉テ言フ可ラス、○七月三日、
信濃ノ淺間岳大ニ火ヲ發シ、震動雷ノ如ク、灰砂ヲ雨ラ
シ、上野武蔵等ノ地、灰積ハ一尺餘、白日晦冥、灯ヲ執リ傘
ヲ張ル、七日、熱沸ノ泥水暴發シ、炭石熱水ノ激走スル所、
三十五村蕩然トシ、洗フカ如ク、死スル者三萬五千餘人、
牛馬筭ナク、浮屍大木利根川ヲ蔽テ下ル、既ニテ雲烟歛
ラス、關東ノ諸州、日ヲ見サルコト數日、禾稼熟セス、大ニ饑

二、奥羽尤モ甚シ、○四年三月廿四日、新番ノ士佐野善左
衛門政言、參政山城守田沼意知ヲ營中ニ殺ス、意知參政
ト為リ、父子權ヲ繼ニス、嘗テ佐野ノ系譜ヲ借リテ返サ
ス、蓋シ奪テ己レカ家譜ヲ裝飾セント欲スルナリ、政言
素ヨリ其專横ヲ憤リ、是ニ至テ益々怒ル、此日營ニ入り、
其退クヲ待テ之ヲ斫ル、大目付松平忠卿之ヲ抱佳ス、意
知創重ク、第ニ歸テ死ス、四月三日、政言ニ自盡ヲ賜ス、監
吏竊カニ意知カ死スルヲ告ク、政言莞爾トメ、死ニ就ク、
府下ノ人民、政言カ墓ニ賽スル者、昼夜群ヲ成シ、稱メ救
世明神ト曰ス、○五年六月、畿内及ヒ諸國大ニ旱シ、奥羽

存リニ飢ユ、○六年先是諸侯財用足ラサレハ、皆金ヲ大
坂ノ富商ニ借ル、迄歳ニ至テ奢侈日ニ長シ國用給ヒサ
ルヲ以テ、多クハ之ヲ償ハス、富商ミナ懲誠ノ貸ス者ナ
シ、諸侯益々窮ス、幕府命ヲ大坂ニ下シ、富商ノ金ヲ官ニ
輸シ、幕命ヲ以テ諸侯ニ貸シ、必ス之ヲ償ハシ、其息七
分ノ一ヲ官ニ收ントス、富商等悦ハス、曰、是我輩ノ貸
ヲ官ニ取ル也ト、是年七月、又命ヲ諸國ニ下シ、寺社及ヒ
農工商ニ課メ、税ヲ納レシム、寺社ハ其境ノ大小ニ從テ
金十圓以下ヲ納レ、農ハ百石コトニ銀廿五錢、工高ハ錦
肆六尺コトニ銀五錢、五年ヲ限テ之ヲ納レ、五年ノ後府

之ヲ償入、融通金ト稱シ、諸侯ニ貸ノ息ヲ收ントス、時ニ
水旱災異ノ餘、百姓大ニ困シ、正租猶納ルコト能ハス、況ヤ
額外税ヲ出スヲヤ、於是天下洶々、怨嗟大ニ興ル、或人田
沼ニ勸ル所ナリ、是時ニ當テ、上ヲ利スルノ策ヲ進レハ
幕府ミナ採用ス、於是游談無根ノ徒、争テ功利ノ議ヲ獻
シ、油塩魚菜等ヲ賣ル者、悉ク其税ヲ納メ、下総ノ印幡湖、
填メ、田ト作サントスルニ至ル、府下囂然トメ、愁苦ノ聲
巷ニ滿ツ、○七月、江戸及ヒ武蔵下総上野下野ノ諸國大
雨連昼夜、十二日ヨリ十九日ニ至テ止ム、利根戸田ノ川、
水高キ、數十丈、閑宿尤モ甚シク、江戸ニ汎濫シ、新大橋

永代橋壞レ、本所淺草下谷千住等悉ク巨浸ト為ル、幕府
船數百艘ヲ出メ數萬人ヲ救フ、又粥ヲ作テ窮民ニ與ヘ、
金ヲ出メ賑貸ス、○九月征夷大將軍家治薨ス、贈官前代
ノ如ク、浚明ト謚ス、八月家治疾アリ、衆治驗トシ、意次因
テ日向陶庵若林啓順ノ二醫ヲ進ム、二人皆意次ニ賂テ
朝見ヲ得ル者、乃チ入テ診シ藥ヲ獻ス、即日三人ニ俸ヲ
與ヘテ侍醫ト為ス、家治其藥ヲ服シ、嘔吐メ瞑眩ス、家治
怒テ二醫ヲ黜ケ、且意次ヲ惡ム、近臣等因テ其專橫私奸
ノ状ヲ陳ス、家治大ニ怒リ、速カニ命メ埋湖融通金等ノ
事ヲ罷シム、意次家治ノ疾篤シト聞テ入テ侍セント欲

ス、近臣拒テ入ラズ、強テ入ラント欲ス、近臣相議ノ之ヲ
刺シテ謀ル、意次其色ヲ察シ大ニ恐レテ退キ、遂ニ病
ト稱メ出テス、廿七日、意次カ老中ノ職ヲ罷メ、稻葉正明
ヲ黜ケテ其祿ヲ削リ、日向若林ノ俸ヲ收メ、廢メ庶人ト
為ス、二人侍醫ト為ル、九日ニシテ罷ラル、時人之ヲ笑フ、
尋テ家治薨ス、先是家治一橋中將治濟ノ子豊千代ヲ以
テ嗣ト為シ、名ヲ家齊ト改ム、時ニ權大納言タリ、即チ西
城ヨリ入テ職ヲ継ク時ニ年十五、○閏十月、田沼意次カ
罪十餘條ヲ責メ、其封ヲ削リ、神田橋ノ邸ヲ收メ、速カニ
築地ノ邸ニ屏居セシム、其移ルニ及テ、市民途ニ要シ、瓦

礫ヲ抛ツコト兩ノ如シ、明年十月、再ヒ命ヲ下シ、其封二万
七千石ヲ削リ、遠州相良ノ城ヲ毀ツ、尋テ卒ス、其葬ヲ送
ルニ及テ復タ瓦礫ヲ抛ツ者アリ、

國史攬要卷之十三

